

経験者採用試験の受験を考えている方へのメッセージ～採用者の座談会～

本年度も経験者採用試験に合格して各府省に採用された方々に、公務員へ転職しようと思ったきっかけなどについて語っていただきました。

ご協力いただきましたみなさま

松浦弘和氏 公正取引委員会事務総局取引部下請取引調査室
(平成28年度経験者採用試験(係長級(事務)))

岡野恭子氏 外務省国際協力局民間援助連携室
(平成28年度外務省経験者採用試験(書記官級))

佐藤克哉氏 水産庁漁政部加工流通課
(平成28年度農林水産省経験者採用試験(係長級(技術)))

中館尚人氏 経済産業省商務情報政策局情報経済課
(平成28年度経験者採用試験(係長級(事務)))

質問1:まずは簡単に今の仕事と前の仕事について、それからなぜ公務員になろうと思ったのかを教えてください。

松浦氏:現在、私は、下請法に係る仕事、具体的には、親事業者と下請事業者の取引において、下請事業者の利益を保護する仕事を行っています。今回が3社目の就業先であり、1社目は民間調査会社、2社目は経済団体と、一貫して中小企業の経営者と向き合う仕事を行ってきました。その中で、中小企業は外部環境に左右されやすく、自助努力では解決できない課題を常に抱えているという状況を目の当たりにしてきました。その根本部分を少しでも改善し、企業が持つ本来の実力で競争できる社会を実現したいと考え、公正取引委員会を志望しました。



岡野氏:私は、日本のNGOに対する資金協力を通じて、支援を必要とする国・地域に対する緊急人道支援及び社会経済開発に携わっています。担当している国はイラク、シリア、アフガニスタンなどのいわゆる紛争地域です。これまでアフガニスタンの日本大使館にて専門調査員、任期付職員として勤務しており、そこでの経験から外務省を志望しました。



佐藤氏:私は、WTOにおける水産関係の貿易ルールの交渉やOECDの水産委員会への対応などといった仕事に携わっています。前職は水産物の専門商社で営業として働いていました。私は、国内の小売業者や加工業者を相手として仕事をしていたので、その方々の苦勞や支援・促進をしていかなければならない点を目にすることが多く、日本の水産業に貢献していきたいという思いから、経験者採用試験を受けることにしました。



中館氏:私は、IoT・ビッグデータ・AIの時代に向けて、データ流通基盤の整備やブロックチェーン技術の活用、シェアリング・エコノミーの推進を行っています。前職はITベンチャーで主に大企業のITシステムのコンサルティングを行っていました。学生時代から、時代の変化に合わせて社会の仕組みを新しくしたいという思いがあったのですが、学生時代はとがっていて、既存体制側の大企業と霞が関には絶対に属するものかと思っていました(笑)。しかし、社会人として3年間働く中で、様々なしがらみを乗り越えて、組織を変革しようとしている取引先の大企業の方々に多く出会うことで視野が広がり、特に日本においては、大きな組織を中から時間をかけて変えていくというアプローチが必要との思いになり、経験者採用試験を受けることにしました。



質問2:経験者採用試験の受験を迷っている方に向けてのアドバイスはありますか。

松浦氏:踏み出そうか迷っている方は、まずは自身の関心のある官庁を調べてみるなど具体的な行動の一つ起こしてほしいと思います。私の場合は、勉強と平行して官庁研究を行いました。希望官庁について知れば知るほど、自分のこれまでの経験を活用できそうな業務、興味のある業務、あるいは今後の日本において重要だと思われる業務等を見つけることができました。それが結果的に採用試験のモチベーションにつながったと思います。

岡野氏:私は、過去、任期付職員として大使館勤務を2回経験しており、2回目の勤務の後にこの試験を受けたのですが、1回目の勤務の後には、公務員試験を受けようとは思いませんでした。当時は、より地域に根ざした草の根の支援に携わりたいという気持ちがあり、NGO職員として働くことを選んだのですが、大きく変化する世界情勢に対し、外交を通じて貢献したいという気持ちが強くなり、外務省職員を志望するに至りました。人生には様々な選択肢があるので、迷っている人には色々なことを考えてほしいと思います。私も受験するまでにすごくたくさんのことを考え、選択肢の一つとして国家公務員を考えていました。転職には個々人のタイミングやご縁もあるので、その中で受けたいと思ったときは是非チャレンジしてみたいと思います。ちなみに私は、その中から国家公務員を選んだわけですが、今はその選択をしてよかったと思っています。

佐藤氏:私は、民間企業で営業の仕事をしていましたが、民間企業では社会的に本当に必要なことに時間やお金を十分にかけれないという状況があります。それができるのは国ではないかと思いました。また、年齢的な節目を迎えるに当たり、同じ人生を使うのであれば、より自分の求めたいもの、本当にやりたいことをやりたいと考えたこともきっかけになりましたので、同じような考えの方がいらっしゃれば参考にさせていただければと思います。

中舘氏:平日は仕事が忙しく、試験勉強や政策の勉強は週末にしかできなかったため、転職には覚悟が必要でした。採用は経済産業省に選んでもらうと同時に自分が経済産業省を選ぶ場でもあると考えていたので、学生時代の先輩、友人などとの縁で経済産業省で働く方に会うことができたときに、良いことも悪いこともリアルな声を聞いて、「本当に自分が働くイメージが持てるか？」と自分に問いかけました。相応の準備が必要なので迷っている方は人に会うなどして実態を把握して、自分がそこで働くことが社会や組織のためになるかを考えることが重要だと思います。私は、新卒採用を受けられる年齢でもありましたが、霞が関に民間の風を入れるという役割を果たしたいという思いもあり、民間経験の色がつくように、あえて経験者採用試験の受験を決めました。

質問3:民間企業で働いている際の国家公務員のイメージはどうでしたか。また、実際になってみてイメージは変わりましたか。

松浦氏:夜遅くまで働いているイメージでした。ただ、実際に働いてみると、もちろんそういう時期や業務もあると思いますが、一方で、公正取引委員会は男性の育児休業取得率が非常に高いなどワーク・ライフ・バランスの実現に向けて力を入れている印象も受けました。よい意味でイメージを裏切られました。

岡野氏:専門調査員として働く前のイメージは、官僚主義で、すごく縦割りみたいな感じで、近

寄りかたいイメージでした。ただ、実際に入ってみると、尊敬できる先輩方との出会いもあり、誰もがそれぞれの立場で、色々な思いを持ちながら仕事をしているということがわかり、すごく身近に感じるようになりました。

佐藤氏:とにかく忙しいのと、エリート、堅いイメージでした。ただ、いざ入ってみると、意外と人間味のある人(笑)、気さくで明るい人が多かったです。

中舘氏:日本のために夜遅くまで働いている人たちというイメージでした。また、情熱的な人が多いのかなとは思っていましたが、その点はイメージ通りでした。もちろん帰宅時間が遅くなることもありますが、成し遂げたときの社会的な影響力は大きいので、非常に意義のある仕事だと思います。また、仕事上、一流の知に触れる機会が多く、知的刺激に溢れているので、それも国家公務員の魅力の一つであると思います。

質問4:最後に、これだけはというメッセージをどうぞ。

松浦氏:働きながら勉強して、希望官庁の情報収集や研究を行うことは決して楽なことではありません。しかし、振り返ってみると、試験や官庁訪問対策で得た知識は今の業務においても十分活用できています。私は、まず一步を踏み出すことが重要だと考えています。最初の一步があったからこそ、公正取引委員会で働いている私がいまいます。迷うくらいであれば行動を起こしてみてください。私たちとしても、中途採用の仲間が増えることは非常に喜ばしいことです。興味のある方はぜひ挑戦してほしいと思います。

岡野氏:受験に向けて準備していた頃、周囲から、相手をよく知って自分をよく知りなさいと言われました。私は受験するなら外務省と決めていたので、国の外交政策などをよく学んで、国が政策として何をやっているのか、そしてそれは自分が入ったときにやりたいことなのかしっかり考えました。そうすることで入省してからのミスマッチも防げ、お互いにとってよいことだと思いますので、ぜひやってみていただければと思います。

佐藤氏:国家公務員に転職ということで不安だと思いますが、研修制度等も充実しており、受け入れ体制もしっかりしていますし、勤務条件面も整備されています。転職後のことは心配せず、まずは挑戦してほしいと思います。

中舘氏:民間経験を積んだ人が入ることは国にとっても非常によいことだと思います。実際に働く中で、動かすのがなかなか大変な組織だと感じることもありますが、それでも社会をよりよくしたいと高い志をもっている人にとっては、最高の職場になると思うので、ぜひ挑戦してほしいと思います。

～ご協力ありがとうございました～